

短期大学の導入教育

森 下 園

上智短期大学部では、2010 年度より必修科目として「基礎ゼミナール」（以下、「基礎ゼミ」）を新たに開講した。これは本学部における初年次教育として位置づけられるものである。「基礎ゼミナール」導入の意義と今後の課題について、ここで簡単にまとめておきたい。

1. 「基礎ゼミナール」導入の経緯

本学部では 2004 年度のカリキュラム改訂により Semester 制が導入され、2 年間の修学期間は 1 年次の春学期（準備期）、秋学期（発展期）、2 年次の春学期（応用期）、秋学期（完成期）の 4 つの学期で構成されることとなった。それまではクラス制をとっており、学生は所属クラスが決められクラス単位で英語必修授業を受け、クラスごとにアドバイザーがついて指導を行っていたが、カリキュラム改革に伴いこの方式は解消された。学生がレベルや目的にあわせて科目履修できる自由度を増やし、2 年次春学期・秋学期に「ゼミナール」を必修科目として導入し、ゼミ担当教員が勉学・学生生活や進路などのアドバイザーとなる方式に切り替えられた。しかし就職活動が 1 年次の秋学期には開始となることや早期の編入学指導の必要から、2009 年度より 1 年次秋学期に「プレ・ゼミナール」を導入、原則として 1 年次の春学期のおわりに所属ゼミを決定後、卒業までの 3 学期はゼミ担当教員がアドバイザーになり、1 年次春学期については必修英語科目の担当教員がアドバイザーとなることとなった。

2004 年度のカリキュラム改訂とほぼ同時期に、学生たちに勉学だけでなく、大学生としてのスタディスキルやマナーなども教える必要があるのではないかという声が教員間からでてきた。レポートの書き方やインターネットでの情報検索などのノウハウのほかに、対人関係を円滑にするためのマナーの習得の必要性が進路担当の教職員より指摘された。短期大学生は、入学後わずか 1 年足らずのうちに就職活動を開始しなければならないことも理由の一つであった。そのため学内共同研究で情報収集のうえ、学生向けのスタディスキルに関する小冊子を試作・配布したのが 2007 年であり、2009 年度から導入教育とそのためのテキスト開発が正式にスタートした。

山田礼子氏によれば、アメリカで大学における初年次教育（First Year Seminar）として 1960 年代から普及していたものを一部とり入れる形で、日本でも 1999 年より導入教育

を行う大学が急速に増加した。日本の大学での導入教育とは、「高校から大学への学習面、生活面を含めての円滑な移行を目指す教育」であり、主に大学生としてのスタディ・スキル、一般常識、専門教育への橋渡しとなる教育などが行われている（山田、2006年、8-9頁）。

本学部では、冒頭に述べたように2010年度より「基礎ゼミ」を導入教育として1年次春学期の必修科目に加えた。そのため教養科目担当教員である宮崎幸江准教授、杉村美佳准教授、小林宏子准教授と森下の4名が2010年度の上智学院教育イノベーションプログラムに「Women for Others, with Others 育成のための短期大学の導入教育—テキスト開発とFD活動」を申請、採択された。前年度には、英語科目担当教員全員がメンバーとなった「建学の精神を反映した内容重視および自己発信型の必修英語プログラム」が同じく上智学院教育イノベーションプログラムに採択されて「必修英語」のテキスト開発を行っており、結果的に全専任教員が「必修英語」テキストまたは「基礎ゼミ」テキスト開発のいずれかに携わることとなった。この英語テキストについては、Chris Oliver先生の論考「*English Essentials: concept, genesis, and place in the curriculum*」を参照いただきたい。

2. 「基礎ゼミナール」のテキスト開発

2009年度にスタートしたテキスト開発は、同時に次年度に開講される「基礎ゼミ」の位置づけを決めるものとなるため、教育イノベーションプログラム申請メンバー間で試行錯誤と議論を重ねた。「基礎ゼミ」は1年次生全員が履修する科目として、本学部でははじめて統一シラバス、統一評価基準のもと、複数教員が同一教材を使って行う科目となったため、テキスト開発と同時に授業シラバスを確定させることも重要となった。

2009年度末に作成した試行版テキストは『*Essentials A Guide to Academic Success*』のタイトルが示すように、主に大学生としてのスタディスキルに重点を置いたものとなった。本学部の必修科目「人間学」を担当する聖マリア修道女会会員の小林准教授が担当した冒頭部分では高校生と大学生の違い、自分でスケジュールを決める責任、2年間の学修計画、本学部で展開しているボランティア活動への招きなどがわかりやすい語り口で書かれ、本学部のディプロマ・ポリシーに沿う内容のものとなっている。ノートの取り方、レポートの作成、教員へのメール発信の注意事項、インターネット・リテラシーなどのほか、日本語学を専門とする宮崎准教授による文章作成の基本を実際書きながら学ぶ章もあり、さらにノートを取る練習とゼミ選択・進路選択の参考とするため、全専任教員によるひとり20分のショートレクチャーを実施してさまざまな授業スタイルを経験させ、学生がとったノートを教員がチェックする機会も設けた。授業は基本的に、教員の講義ではなくグループワークや学生の発表など学生の主体的な活動を中心に行うことが決められた。

2011年度のテキストは、「ESSENTIALS — A Guide to Better Communication

Skills」とタイトルが変更され、頁数も2009年度版の70頁から108頁へと大幅に増加した。有限会社つくば言語技術教育研究所長の三森ゆりか氏のご協力を得て言語技術の教員向け研修に教員が参加し、教材をご提供頂くことで日本語での論理的な文章構成力・発信力の涵養に重点をおいた。2012年度には「ESSENTIALS – A Guide to Finding the Right Career Path for You」となり、さしせまった問題として重要性が高まっていた学生の進路決定を助ける目的に重点を置き直すこととなり、頁数はさらに137頁に増加した。この2012年度版が当面はスタンダード・テキストとして運用される予定となっている。

なお、タイトルの「Essentials」はChris Oliver准教授がアイディアを出して下さり、さらに近藤佐智子教授がサン＝テグジュペリの『星の王子様』の一節、“What is essential is invisible to the eye.” (Antoine de Saint-Exupéry, *The Little Prince*, Translated by Katherine Woods, N.Y., 1943) を提示くださったことから決まり、同じタイトルが「必修英語」テキストでは*English Essentials*として使われている。

3. 「基礎ゼミ」のシラバスと理念

2010年度の「基礎ゼミ」は7人の教員が担当したが、テキストの章にそってほぼ同じスピードで授業をすすめるようにはなかった。そのため、毎週担当教員間で課題の進度や授業の進め方についてのショートミーティングを行い、そこで得られた情報を他の教員と共有するようにしたが、初年度はやはり授業の進め方などで統一しきれない部分もでてきた。そこでこの経験を踏まえて、2011年度は学生用のシラバスとは別に教員用のシラバスを作成して評価や進め方を統一するようにした。準備学習や課題、到達目標と達成目標などについては、「基礎ゼミ」は導入当初からそれらを学生に明示することを心がけている。

学生像も多様化してきており、多言語環境で育った学生も一定数いるとの認識から、2012年には新入生を対象に記名式アンケートを実施したところ、多様なバックグラウンドを持つ学生が予想以上に多く、長期の留学など日本語以外の言語を使う環境に一定期間以上あった学生が全学生の約10%を占めることが判明した。こうした学生たちは、場合によっては日本語の文章作成によりきめこまやかな指導を必要とすることもあるが、同時に多文化共生社会において指導的な役割を果たす学生としても期待されるため、一クラスをこうした学生にわりあてることとした。

山田氏の論考では、日本の導入教育はレポートの作成方法や図書館利用などの「技術指導」に終始しがちであるが、アメリカでは「社会生活スキルの向上と円滑な人間関係の構築」、「分析能力、批判的思考技術の向上」が求められるという。大学共同体の一員としての自覚を促すための導入教育であるべきなのである(山田、2006年、14-15頁)。

本学部の「基礎ゼミ」も、当初はスタディスキルにやや重点がおかれていたが、クラス運

営を通して、重要なのはスキルの涵養だけではないということに気付かされた。「基礎ゼミ」は初年次の緊張をほぐし、ざっくばらんに意見を述べたり疑問を互いにおつけることで、学生が聞くことをためらっていた小さな問題を早期に解決する場ともなること、講義スタイルではなく、学生が主体的に発言できる場を作り、短くともプレゼンテーションを行うことで、学生が自信をつける場ともなることを実感している。異なる世代やバックグラウンドの人と意見交換をしたり、あるいは徹底的に議論をするといった経験が浅い学生にとって、「基礎ゼミ」は、学生が教員に自分の意見をいってもよいのだという発想の転換を促す場でもある。

特に自己を語るプレゼンテーションは、自分に自信を持っていない学生を1対1で指導することで、自信をもって語れる経験が自分のなかに多く蓄積されていることを気付かせるきっかけにもなっているし、就職活動で重要な「自己分析と自己の長所の発見」を先取りして行うことができる。また、DVD教材は世界の教育・環境・貧困問題などをとりあげたものを使用することで、世界で起きていることへの興味関心を促す役割も果たしている。

このように、「基礎ゼミ」は本学部のディプロマ・ポリシーのなかの他者とのコミュニケーション能力の涵養や、様々な背景を持つ人々との相互理解を促す科目と見なすこともできるのである。

4. 「基礎ゼミ」の課題

少人数クラスが望ましいのであるが、どうしても25～30人前後のクラスサイズとなってしまう。そこでグループワーク、ペア・ワーク、ピア・チェックなどを中心としたやり方を用いることになる。学内のFD活動を通して教員間で授業の進め方について、今後も意見交換を行う必要がある。

「基礎ゼミ」は教員の専門領域にかかわらず、全専任教員が担当する科目となっており、次年度には全ての専任教員が1度は担当した経験をもつことになる。これから、カリキュラム改革が予定されているが、「基礎ゼミ」を本学部の導入教育として機能させるためにも、テキスト・シラバスの改訂が今後必要となってくるだろう。

授業評価は総じて評価が高いが、まだ課題も散見される。学生の声を聞いて、授業改善を進めていくことが求められているのである。

参考文献

山田礼子「大学における導入教育の拡がり」と意義『大学と学生』（独立行政法人学生支援機構発行）503号、2006年6月号、8-16頁。